④ 中山地区センター建設委員会　公募制の導入

1 利用者の立場の意見取り入れのため、建設委員会に公募制を導入

地区センター建設委員会は地縁型組織代表を主体とした構成となるのが通常であったが緑区では、①テーマ型で活動している市民等実際に地区センターを利用する立場からの意見を取り入れる、②積極的に市民参加を推進する、という観点と、区内に文化団体など実際に活動している人の連絡組織がなかったという地域特性を考慮し、公募制を採用することとした。公募制導入は、市民局でも一つの方法として考えていたようだが、実際には、中山地区センターが初めての例となった。

●地域組織代表委員と公募委員のバランス

全体の委員数は、話し合いを深めるために二十人程度と決定。地域組織が機能しており、これらの要望を入れる必要がある等、地域特性を踏まえ、公募枠は五人となった。

緑区の担当者は、地縁型組織と公募の望ましい比率について、「地域特性によって異なると考えられるが、すべて公募とすると、委員の意見が『代表意見』といえるかどうか疑問が残る。地縁型・テーマ型半々位なら大丈夫ではないか。」と述べている。

●多様なルートで公募をPR

公募媒体は、町内会回覧と広報よこはまが一般的である。しかし、これだけでは、テーマ型で活動している人の目にとまらない。また、広報紙に載せるには時間的余裕がなかったこともあり、文化団体代表者にダイレクトメールを送る、個人的に声をかける、区内地域施設等で応募用紙を配布するなど、様々な工夫をし、特に、実際に体を動かして活動している人を集めるよう努力した。

結果として、十九件の応募があり、募集期間が二週間と短かったにしては、予想以上の数となった。

●公募は人選が大切

実際に活動している人を対象とするため、応募条件を区在住・在勤で、地域サークル活動に参加していることとし、応募用紙に応募の動機、活動状況を記入してもらった。

応募者から五人に絞るため、審査会を組織した。メンバーは、利用圏域となっている二つの連合町内会長、既設地区センター・コミュニティスクール館長各代表、緑区長で構成し、選定にあたっては、活動分野と地域のバランスを考慮した。

選考結果は、文化・芸術から二人、子育て、暮らし、福祉から各一人という構成になった。

●公募以外の委員の選定

人数構成の上から、二連合町内会からジャンルごとに委員を選出することはしないで、両地域の一方からの選出に振り分けた。地元から若干意見もあったが、「人数が多くては話し合いができない」ということで了承してもらった。

また、単位町内会も一つだけとした。これについても意見が出たが、連合自治会が出ていることと、どうしても出たい人は公募でとお願いした。

一方、地域代表委員を「会長はお忙しいと思うので、どなたか会で活動している方の中から」とお願いしたところ、実際に動ける人に委員になってもらうことができた。この結果、地域組織代表十六人のうち、女性が六人となった。

2 課題

❶意見を言いやすい雰囲気づくり

二十人が一同に会しての会議形式では、一般の市民はなかなか意見が言いづらい。少人数でのグループ討議や、ポストイットによる

データ

事業主体	緑区役所区政推進課
関係部局	市民局地域施設課、建築局庁舎施設課
事業概要	中山地区センター建設事業
施設概要	所在地／緑区中山町413-49 敷地面積／4,111㎡、延床面積／1,700㎡ 併設施設／地域ケアセンター、福祉機器サービスセンター・機能訓練センター、民間福祉保健活動拠点
事業期間	平成７～８年度　基本設計・実施設計 平成８年度末　着工 平成10年度　竣工（予定） 平成11年度　開館（予定）
参加形態と対象	建設委員会（公募委員の導入、地域組織代表委員選定の工夫）

意見出し、まち歩きや敷地見学をしながらの意見交換などの方式を取り入れることにより、雰囲気をほぐす工夫が必要であろう。

❷プロセスを重視した議論の進め方

中山地区センターの建設委員会は、ごく一般的な進め方で合計五回開催された（図）。

しかし、参加者の声にもあるように、市民に意見を求めるならば、

①地域ニーズの把握、地区センターとはどのような施設なのか等情報提供をし、参加者がそれを勉強する時間をとる、

②図面提示前に、施設で何をしたいのか、どのような利用の仕方（人数、時間帯、道具など）をしたいのか、どんなイメージの施設であって欲しいか、という思いを出し合う、

③委員が共通認識を持てるよう議論を重ねる、

④設計は、それらの意見を踏まえて行う、等

プロセスを重視したい。そのためには、ある程度の回数を当初から予定すること、合意形成のため、必要とあらば若干回数を増やすなどの柔軟な対応をとることが大切である。

ただし、トータルの面積や費用など、一定の条件があることは最初から理解してもらうこと、市民の意見をできるだけ受けて設計する体制を整えることは、当然必要である。

議論を積み重ねることは、良い施設づくりにつながるだけでなく、メンバーの相互理解が進むことによって、その後の施設運営や地域のコミュニティネットワークの形成に役立つ、という視点を持つことも重要である。

参加者の声

≪区役所担当者≫

・議論の素材が不足していたため、建設的な意見がでなかった。

・地区センターが何か、を勉強する時間が必要。ニーズ調査や周辺地域の実地調査、周辺施設の利用状況調査などしてもっと時間をかける必要がある。一年間でも八回位やれば十分な議論ができるのではないか。

≪参加者Aさん（区民会議委員、建築家）≫

・市民の施設への思いを組み立てるのが設計者の役割。設計することが何であるのか、市民も行政も心得ていない。

・図面にいくまでのプロセスが重要。委員会を月一回ずつくらい開いてもっと議論することが必要。実際の敷地に行って立地条件を見て周辺調査をしたり、構想の段階でイメージをつくることが必要。図面は最後の一週間でかける。

・委員の選び方は良い。しかしお互い同士知らない人が多く、共通の認識を持つまで議論が必要。メンバーに都市計画や建築の専門家を入れると、意見のとりまとめ役になれると思う。

・議論が内部利用にしぼられた。屋外で休憩できる緑化スペースや、一階（の共用）部分で休憩したり食事をする場所などがあるとよい。

・入り口付近など共通して利用する部分のあり方を検討するため、合築の場合は合同の建設委員会を三回くらいもったほうが良い。

≪参加者Bさん（文庫活動をしている。団地居住二十五年目）≫

・意見が言いにくい雰囲気。知らない人が多く自分の意見を言いづらかった。三回目位から雰囲気がほぐれ、意見が活発にでるようになった。

・勉強する時間や情報がもっとほしかった。地域の利用者としてトータルにみるための情報が不足していた。

・二案がでた時は、これはどこで決まったの、という感じだった。白紙の状態で議論できないか。全体として、あらかじめ決められているという感じで、参加の実感はうすかった。

・今後は運営について考えたい。館によって運営が相当違うという話や運営委員会に利用者の意見が反映されるよう、運営面での工夫が必要と感じている。
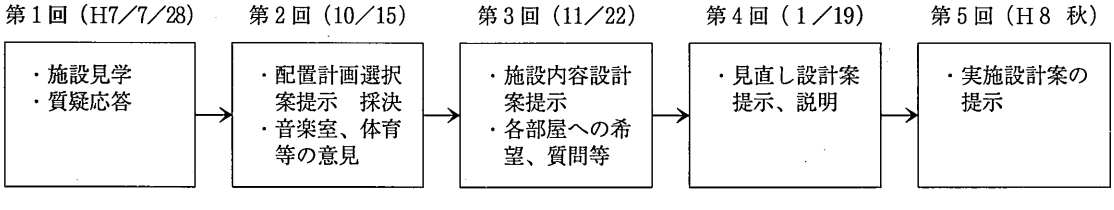
図　中山地区センター建設委員会の流れ